

二松学舎大学人文学会第 129 回大会

プログラム

- 日 時 2024 年 12 月 14 日（土） 13:00～（開場 12:30）
- 開催方式 対面（講演は YouTube 配信併用を予定）
- 会 場 二松学舎大学 九段キャンパス 1 号館 2 階 201 教室（研究発表）
地下 2 階 中洲記念講堂（講演）
- 講 演 片渕須直「枕草子から映画を作るには何と何が必要か」
- 研究発表 13:00～15:10

- 欧阳文彬「嘉靖壬午本『三國志演義』の注について」
(本学大学院文学研究科博士後期課程)
- 三木啓介「『甄正論』引『呉越春秋』および『越絶書』の佚文について」
(本学大学院文学研究科博士前期課程修了)
- 関俊史「張懷瓘における王羲之観一庾肩吾・李嗣真的評価を補助線に一」
(本学文学部専任講師)
- 吉丸雄哉「創作における女の忍者の誕生と変遷」
(本学文学部教授)

■講 演 15:30～17:00

■閉 会 17:00

要
旨
集

嘉靖壬午本『三國志演義』の注について

欧阳文彬

『三國志演義』(以下は『演義』)は、中国文学史上極めて重要な作品であり、多くの読者に親しまれている作品である。この物語は宋元期の民間における三国故事を土台とし、史書によつて考証したり、エピソードを増補したりし、さらにフィクションや伝説的な要素を加えて、英雄たちの物語を描いている。現代においても世界各国の言語に翻訳され、広く読まれている。しかし、『演義』の成立過程は多くの謎に包まれている。作者さえ確定されておらず、目下、元末明初の戯曲作家、羅貫中とされるが、この人物について詳しい足跡はわかっていない。『演義』の成書以降、数世紀にわたり様々な版本が作られ、多くの批評家や書坊によつて異なる変更が加えられているため、その本来の姿に遡ることはとても難しい。

本発表では、数十種の版本の中で現存最古の嘉靖壬午本を対象とし、先行研究を踏まえ、嘉靖壬午本の小字注を手がかりに検討を試みる。具体的には、小字注を本文と注の関係、注の内容及び年代によつて分類し、どれが作者の手によるものか、どれが後世の人がつけ加えたものか、またその割合と変遷を明らかにしたい。それを通じて、『演義』の成書時期と作者、注者の姿をうかがえるだろう。

(おうよう・ぶんひん／本学大学院文学研究科博士後期課程)

『甄正論』引『呉越春秋』および『越絶書』の佚文について

三木啓介

後漢期に成立したとされる、春秋期の呉越戦争を描いた『呉越春秋』および『越絶書』は、歴代目録と現行版の巻数が一致せず、数多くの佚文が諸本に確認できる。両書の佚文は中国で何度か輯佚が試みられてきたが、仏典がほぼ参照されていない。仏典に確認できる両書の佚文のうち、発表者が注目するのは、武周期の釈玄疑『甄正論』に引用される佚文である。

『甄正論』は、滯俗公子と甄正先生による問答体になっており、問題の佚文は前者が引用している。この佚文は先述のように過去の輯佚からは漏れているが、いくつかの論文で行論のための一文献として利用されている。他方、発表者はこの佚文そのものに注目する。

実はこの佚文は、使用される用語などの問題があり、引用元を両書とするには疑わしい。ただし、この佚文が両書からの引用とされていることに意義がある、と発表者は考える。また、この引用に対する甄正先生の回答からは、当時における両書の位置が垣間見える。

かかる観点から、本発表ではまず『甄正論』に引用されるこの佚文の内容を検討し、続いて他文献も参照しながら両書の同時代における受容の一端を示したい。

(みき・けいすけ／本学大学院文学研究科博士前期課程修了)

張懷瓘における王羲之観 ― 庾肩吾・李嗣真の評価を補助線に ―

関俊史

中国書論の論題の一つに品第論がある。品第論とは、人物を等級によってランク付けし、その優劣を定めるものである。「書」における品第は、庾肩吾『書品』が嚆矢となり、初唐に李嗣真が『書後品』を著し、さらに、張懷瓘『書断』で同じく品第による評価をしている。

中田勇次郎は庾肩吾『書品』から清代に至るまでに「品」によって評価した書論を列挙し、その展開を示した。特に張懷瓘については、「六朝以来の伝統書道の書論を承けたものであり、『書断』における神・妙・能の品第法も、六朝における九品説よりも一歩を進めて、内面的な方法において新しい境域を開いている」と位置づけている。また、薛龍春は、張懷瓘が設けた神品・妙品・能品といった三品の枠組みが、張懷瓘以後の画や文の品第に大きく影響を与えたことを論じている。また、成田健太郎は『書断』で張懷瓘が品第に書体論を組み込んだことで、書体論がいかに機能しているかを論じている。

かかる先行研究はいずれも品第論の展開を問題にしている。本報告は、そうした研究とは視点を異にし、王羲之を軸として、品第論で王羲之がどのように扱われ、それが張懷瓘に至つてどのように転換したかを論じることとしたい。

(せき・としふみ／本学文学部専任講師)

創作における女の忍者の誕生と変遷

吉丸雄哉

女の忍者は歴史上存在せず、現在の創作で見る、男の忍者と同様の忍び装束をし、手裏剣を打ち、忍術をつかう女の忍者は戦後の創作から現れたものである。江戸期には情報収集に協力する者や、女の妖術使いや女の盗賊の亜種として魔的な忍術を使う者が創作に登場していた。大正期に正義の忍者が登場するに伴い、忍術をつかう勇婦も登場する。現在において典型的な女の忍者は富田常雄『猿飛佐助』(一九四八)より始まる。男同様の武術・忍術での活躍をし、戦後作品らしく性的な面も描かれ、この要素は山田風太郎の忍法帖で強調されていく。戦後社会での女性の社会進出を反映して、男性と同等かそれ以上の能力を持つが、男の忍者ほど非情になりきれないという弱みのある女の忍者が一九六〇年代頃の時代小説に続出するが、掲載誌の主要読者である男性の理想を反映したものである。男の忍者とまったく同等に活躍する女の忍者は池波正太郎の忍者小説で広まる。一九九〇年代以降のジュヴナイル向けの創作ではあこがれの対象として女の忍者が描かれ、二〇〇〇年以降では有能で自立した女の忍者が活躍する。以上のように女の忍者は、その時代ごとの理想の女性像が形となっている。

(よしまる・かつや／本学文学部教授)